

〔赤染衛門集〕日ごろこもりたるに、夜谷に猿の啼しに、たよりなき猿とはわれぞおもひつる木をはなれたる猿もなくなり、

〔源平盛衰記 二十四〕南都合戦同焼失附胡德樂河南浦樂事

入道盛中略平清、イカ様ニモ南都ニハ謀叛人ノ籠タルト覺ユ、追討使ヲ遣テ可攻トゾ披露セラレケ

ル、南都ノ大衆此事ヲ聞キテ、落籠タル謀叛人ハ誰ガシゾ、一天ノ君ヲ始メ奉リ、卿相雲客奉流失、天下ヲ亂テ、今ハノコル處ナク振舞テ、無實ヲ構ヘ佛法ヲ亡サンヤ、目醒シキ事ナリ、恐クハ木ヲ離タル猿ノ迎ヤ儲セヨトテ、木津川ニ廣サ一町計ノ浮橋渡シテ、左右ニ高欄ヲ立タリケリ、

〔松屋筆記 八十二〕掩耳偷鈴

明高僧傳法忠傳に、假使淨名杜口毘耶、釋迦掩室摩竭、大似掩耳偷鈴、未免天機漏泄云々、俗諺に猿が耳を掩て鈴を盗といふにおなじ、

〔源平盛衰記 二十三〕頼朝鎌倉入勸賞附平家方人罪科ノ事

山内瀧口三郎同四郎ハ廻文ノ時略中猫ノ額ノ物ヲ鼠ノ伺フ。定ヤナンド、惡口シタリシ者也

〔日本書紀 仁徳 三十八年七月〕天皇與皇后居高臺而避暑時、每夜自兔餓野有聞鹿鳴略、俗曰昔有

一人往兔餓宿于野中、時二鹿臥傍將及雞鳴、牡鹿謂牝鹿曰、吾今夜夢之、白霜多降之覆吾身、是何祥

焉、牝鹿答曰、汝之出行、必爲人見射而死、即以白鹽塗其身、如霜素之應也、時宿人心裏異之、未及味爽

有獵人以射牡鹿而殺、是以時人諺曰、鳴牡鹿矣、隨相夢也、

〔漢語大和故事 二〕鹿ヲ追者ハ山ヲ不見、コノ諺ハ、愚人ハ利欲ニノミ目ヲカケテ、道理ノアルト

コロヲ不知事、鹿ヲ逐テ山ノ目ニ見ヘヌガゴトクトナリ、淮南子云、逐鹿者不顧兔、又曰逐獸者目不見大山、嗜欲有外、則明所蔽矣、コレヲ語ヨリ本キ出タリ、

〔塵袋 九〕一キツ子トラノ威ヲカルト云フ如何